

## —部材が純曲げ純捩りモーメントを個々に受けた場合—

九州大学 正員 山崎徳也

〃 正員 太田俊昭

〃 学生員 ○川島基義

1.序言 先に著者は純曲げおよび純捩りモーメントを個々に受けた直線部材が構成される立体ラーメンに対する実用弾塑性解法を提示したが、工形断面ばかりを曲げ部材として使用する場合には歪硬化の影響が無視できないため、また一樣捩りモーメントに対しては塑性領域が部材の全長にわたって生じ、捩り剛性を著しく低下させたため、これらを諸実験結果密に検討することが必要となる。この見地から本論文では新たに歪硬化を考慮した弾塑性たわみ角式と厳密下の曲線に基づいた弾塑性捩り角式とを導き、これを用いて上記構造物の弾塑性解析を在来の弾塑性たわみ角法と準静的手法と行なうところごとくし、併せて塑性域および歪硬化域での構造物の応答特性を解明せんと試みるものである。

## 2. 基本式の説明

## (1) 歪硬化を考慮した弾塑性たわみ角式

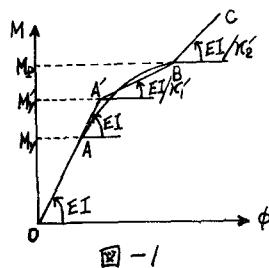


図-1

一般に鋼材の曲げモーメント  $M$  と曲率  $\kappa$  の関係を弾性域より歪硬化域に至るまで追跡すれば図-1の直線  $OA$  (弾性域) 曲線  $AB$  (弾塑性域) やおよび直線  $BC$  (歪硬化域) で表わされる。

計算の簡易化のためにこの  $M-\phi$  曲線部  $AB$  を直線  $OA$  を延長した直線  $A'A'$  やおよび  $AB$  で近似すれば、これらを近似直線 ( $M$  中近似直線と称す) に基づく曲げ修正エネルギー  $U_M$  は著者らの研究<sup>2)</sup>より既に求められており、結果を示せば次式で与えられる。

$$U_M = \int_{P+EI}^{\frac{M^2}{2EI}} ds + \chi_1 \int_{P+EI}^{\frac{(M-M_p)^2}{EI}} ds + \chi_2 \int_{S}^{\frac{(M-M_p)^2}{2EI}} ds \quad \cdots \cdots (1)$$

ここで  $M_p$ : 降伏曲げモーメント,  $M_p$ : 完全塑性曲げモーメント,  $M'_p = (M_p - EI\phi_p/\kappa)/[1 - 1/\kappa]$ ,  $E$ : ヤング率,

$I$ : 断面2次モーメント,  $\chi_1 = \kappa'_1 - 1$ ,  $\chi_2 = \kappa'_2 - \kappa'_1$ ,  $\phi_p = \kappa'_1 \{M_p - (1 - 1/\kappa')M'_p\}/EI$ ,

ただし  $\kappa'_1, \kappa'_2$  は  $M$ - $\phi$  近似直線を規定する定数であり、詳しくは文献(1)を参照のこと。また積分記号の添字  $E, P$  や  $S$  はそれぞれ弾性域 ( $|M| \leq M_p$ ) 弹塑性域 ( $M_p < |M| < M'_p$ ) やび歪硬化域 ( $M'_p \leq |M|$ ) を表わす。

次に式(1)に積分原理を適用すれば歪硬化を考慮した曲げ部材  $ab$  の弾塑性たわみ角式が容易に求められる。文献(1)と同一形式の式となる。

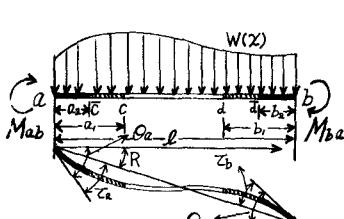


図-2

$$M_{ab} = \chi_{ab} (\alpha_{ab} \varphi_a + \beta_{ab} \varphi_b + \gamma_{ab} \psi_{ab}) + \delta_{ab} M'_{ya} + \epsilon_{ba} M'_{yb} + C_{ab} \quad \cdots \cdots (2)$$

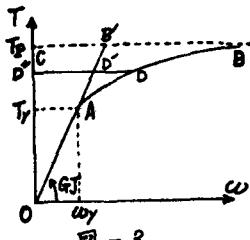
$$M_{ba} = \chi_{ab} (\lambda_{ba} \varphi_b + \beta_{ba} \varphi_a + \eta_{ba} \psi_{ab}) + \eta_{ba} M'_{ya} + \nu_{ba} M'_{yb} + C_{ba}$$

ここで  $\varphi_a = 2EK_a \theta_a$ ,  $\varphi_b = 2EK_b \theta_b$ ,  $\psi_{ab} = -6EK_a R$ ,

ただし  $\theta_a, \theta_b$  やび  $R$  はそれぞれ節点  $a, b$  の回転角および部材  $ab$  の部材回転角。  $K_a$ : 横弹性係数,  $\chi_{ab}$ : 部材  $ab$  の剛比,  $M'_{ya}, M'_{yb}$ : 各点  $a$  点および  $b$  点の  $M'_y$  の符号は作用モーメントの向きで合致する。  $C_{ab}, C_{ba}$ : 各点  $a$  および  $b$  節端よりの固定端モーメント。

また式(2)諸係数は弾塑性領域を示す  $a_1, b_1$  と硬化化領域を示す  $a_2, b_2$  とで規定され無次元定数で個々の内容は文献(1)或(3)と同一形式となる。

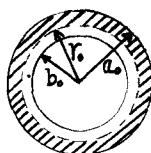
## (2) 弹塑性挙り角式



一般に鋼材の弾塑性領域での挙りモーメントと慣性角の関係は図-3の  $\overline{AB}$  のごとき曲線で表わされる。このとき単位長さ当たりに貯えられた挙り補正エネルギー  $\Delta U_f/GJ$  は  $\Delta U_f/GJ = \int GdT$  で定義されるが、結局図-3の面積  $ADD''$  と面積  $ADD'$  の和で与えられる。

$$\text{すなはち } \Delta U_f/GJ = T^2/2GJ + A_1 \quad \cdots \cdots \cdots (3)$$

ただし  $A_1$ : 面積  $ADD'$



ここで図-4のごとき外径  $R_o$ 、内径  $R_i$  の円管断面直線ばりを対象に選べば式(3)の  $A_1$  は次のよう求められる。いま中心より弾塑性境界に至る距離を  $l$  とすれば膜理幅より挙りモーメント  $T$  が次式で求められる。

$$T = \pi \cdot \sqrt{GJ} \cdot \left\{ 4R_o^3 - R_o^2 - 3R_i^2/l \right\} / 6 \quad \cdots \cdots \cdots (4)$$

$$\text{一方 } A_1 \text{ は } A_1 = \int_{R_i}^{R_o} \omega(\partial T/\partial r) dr = (T^2/2GJ) - (T^2/2GJ) \quad \cdots \cdots \cdots (5)$$

(上表記された式を式(4)を代入するも整理すれば次式となる。

$$A_1 = \pi \cdot \sqrt{GJ} \cdot \left[ (R_o^2 - R_i^2) + \frac{3}{4} \left( \frac{1}{R_o^2} - \frac{1}{R_i^2} \right) \right] / 4GJ + T^2/2GJ - \pi^2 \sqrt{GJ} \cdot (4R_o^3 - R_o^2 - 3R_i^2/l)^2 / 216GJ \quad \cdots \cdots \cdots (6)$$

ただし  $\sqrt{GJ}$ : 降伏剛性、  $G$ : せん断弾性係数、  $GJ$ : 挙り剛性。

したがって一様な挙りモーメント  $T$  が作用するときは、より全体に貯えられた挙り補正エネルギー  $\Delta U_f$  は結局次式で与えられる。

$$U_f = T^2 l / 2GJ + F(T) \quad \cdots \cdots \cdots (7)$$

$$\text{ただし } F(T) = \pi \cdot \sqrt{GJ} \cdot l \left[ \left( R_o^2 - R_i^2 \right) + \frac{3}{4} \left( \frac{1}{R_o^2} - \frac{1}{R_i^2} \right) \right] / 4GJ + T^2/2GJ - \pi^2 \sqrt{GJ} \cdot (4R_o^3 - R_o^2 - 3R_i^2/l)^2 / 216GJ$$

$T_p$ : 降伏挙りモーメント、  $T_b$ : 完全塑性挙りモーメント。

さて外端  $R_o, R_i$  の挙りモーメントおよび挙り角をそれぞれ  $T_{ab}, T_{ba}$  および  $\theta_a, \theta_b$  とすれば一般に変形無理より次の関係式が成立する。

$$\text{すなはち } \theta_a - \theta_b = \Delta U_f / GJ \quad \cdots \cdots \cdots (8)$$

式(8)の右辺に式(7)を代入するも整理すれば、結局次の式で所要の弾塑性挙り角式を得る。

$$T_{ab} = 2\beta (\theta_a - \theta_b) + \pi \sqrt{GJ} \cdot T_p(Y_o)$$

また  $T_{ab} + T_{ba} = 0$  なる釣合式より

$$T_{ba} = -T_{ab} = 2\beta (\theta_b - \theta_a) - \pi \sqrt{GJ} \cdot T_p(Y_b)$$

$$\text{ただし } \beta = GJ / 4EKJL, T_p(Y_o) = (4R_o^3 - R_o^2 - 3R_i^2/l) / 6, L: 1/4 の 倍 も$$

} (9)

## 3. 解法

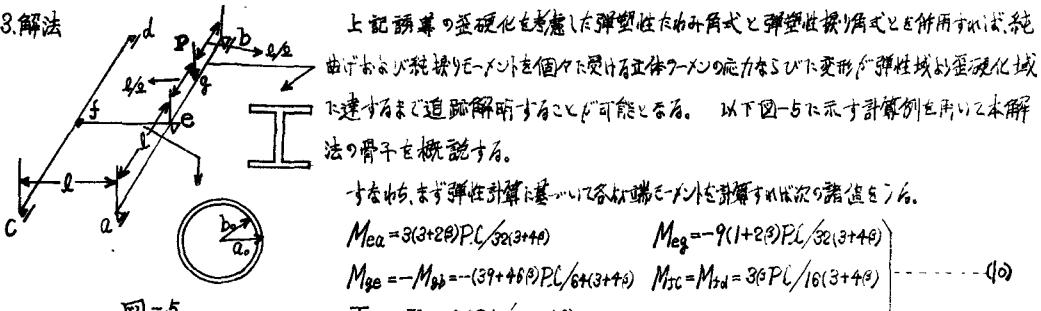


図-5

次に塑性域および至硬化域におけるモーメントと力の釣合式を求めれば本紙下記のごとくえらぶる。

$$\begin{aligned} \sum M_e &= M_{eq} + M_{ea} + T_{ef} = 0 & \sum M_g &= M_{ge} + M_{gb} = 0 \\ \sum M_f &= M_{fc} + M_{fd} + T_{fe} = 0 & \sum F_g &= 2f(M_{gb} - M_{eq} - M_{gc}) - P = 0 \end{aligned} \quad \text{--- (11)}$$

ここで各材端の立端モーメント式を  $T_y$  で除して無次元化すればそれが次のごとく示される。

a-e スパン;

$$M_{ea} = d'_{ea} \bar{\Phi}_e - \eta'_{ea} \bar{M}'_{ye} \quad \text{ただし } d'_{ea} = d_{ea} - \beta_{ea} \beta_{eq}/dec, \eta'_{ea} = \eta_{ea} - \beta_{ea} \beta_{eq}/dec$$

e-g スパン;

$$M_{eq} = 2(d_{eq} \bar{\Phi}_e + \beta_{eq} \bar{\Psi}_g + \gamma_{eq} \bar{T}_{eq}) - \beta_{eq} \bar{M}'_{ye} + \gamma_{eq} \bar{M}'_{yg}, \quad M_{ge} = 2(d_{ge} \bar{\Phi}_g + \beta_{ge} \bar{\Psi}_e + \gamma_{ge} \bar{T}_{eq}) - \eta_{eq} \bar{M}'_{ye} + \eta_{ge} \bar{M}'_{yg}$$

g-b スパン;

$$M_{gb} = 2(d_{gb} \bar{\Phi}_g + \gamma_{gb} \bar{\Psi}_b) + \beta'_{gb} \bar{M}'_{yg} \quad \text{ただし } d_{gb} = d_{gb} - \beta_{gb} \beta_{gb}/dec, \gamma_{gb} = \gamma_{gb} - \beta_{gb} \gamma_{gb}/dec, \beta'_{gb} = \beta_{gb} - \beta_{gb} \gamma_{gb}/dec$$

--- (12)

C-f スパン;

$$M_{fc} = d'_{fc} \bar{\Phi}_f - \eta'_{fc} \bar{M}'_{yf} \quad \text{ただし } d'_{fc} = d_{fc} - \beta_{fc} \beta_{cf}/dec, \eta'_{fc} = \eta_{fc} - \beta_{fc} \beta_{cf}/dec$$

f-d スパン;

$$M_{fd} = d'_{fd} \bar{\Phi}_f + \beta'_{fd} \bar{M}'_{yf} \quad \text{ただし } d'_{fd} = d_{fd} - \beta_{fd} \beta_{fd}/dec, \beta'_{fd} = \beta_{fd} - \beta_{fd} \eta_{fd}/dec$$

f-e スパン;

$$T_{fe} = -\bar{T}_{eq} = 2\beta(\bar{\Phi}_e - \bar{\Phi}_g) + \sqrt{\beta^2 \cdot \pi \cdot T_f(Y_0)}$$

$$\text{ここで } \bar{\Phi} = \Phi/T_y, \quad \bar{\Psi} = \Psi/T_y, \quad \bar{M}_y = M_y/T_y, \quad \bar{T}_f(Y_0) = T_f(Y_0)/T_y$$

式(11)に式(12)を代入し整理すれば次式がえらばる。

$$\begin{pmatrix} 2\beta_{eq} & 2dec + d'_{eq} & -2\beta & 2\beta_{eq} \\ 2(d_{eq} + d'_{gb}) & 2\beta_{ge} & 0 & 2(\beta_{ge} - \beta'_{gb}) \\ 0 & -2\beta & d'_{fd} + d'_{fd} + 2\beta & 0 \\ 2(d'_{gb} - d_{eq} - \beta_{eq}) & -2(\eta_{eq} + \beta_{eq} + \gamma_{gb}) & 0 & -2(\gamma_{eq} + \beta_{eq} + \beta'_{gb}) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \bar{\Phi}_g \\ \bar{\Phi}_e \\ \bar{\Phi}_f \\ \bar{T}_{eq} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} (\beta_{eq} - \beta_{ge} + \eta_{eq}) \bar{M}'_{ye} + \sqrt{\beta^2 \cdot \pi \cdot T_f(Y_0)} \\ (\eta_{eq} - \eta_{ge} - \beta'_{gb}) \bar{M}'_y \\ (\eta_{fc} - \beta'_{fd}) \bar{M}'_{yf} - \sqrt{\beta^2 \cdot \pi \cdot T_f(Y_0)} \\ (-\beta'_{gb} - \beta_{eq} + \beta_{ge} - \eta_{eq} + \eta_{ge}) \bar{M}'_{yg} + (3 + 4\beta) D_{33} \end{pmatrix} \quad \text{--- (13)}$$

ただし  $\bar{M}'_{ye} = \bar{M}'_{yg} = \bar{M}'_{yf} = \bar{M}'_y$

なお曲げ部材に生ずる塑性領域  $a, b$  および至硬化領域  $a, b$  は、曲げモーメントの適合条件式により各スパンごとにそれぞれ下記のごとくえらぶ。一方横り部材の塑性域を規制する  $\gamma$  としては、式(4)の下で  $T_{ef}$  値を代入してえらぶ多項式方程式の実根のうち、条件  $b_1 \leq Y_0 \leq Z_0$  を満たすものを採用する。

a-e スパン;

$$\bar{Q}_1 = \bar{Q}_2 = 0, \quad \bar{b}_1 = -\bar{M}_y/\bar{M}_{ea}, \quad \bar{b}_2 = -\bar{M}_p/\bar{M}_{ea}, \quad \bar{Q}_1 = \bar{Q}_2 = 0, \quad \bar{b}_1 = -\bar{M}_y/\bar{M}_{to}, \quad \bar{b}_2 = -\bar{M}_p/\bar{M}_{to}$$

e-g スパン;

$$\bar{Q}_1 = (\bar{M}_{eq} + \bar{M}_y)/(\bar{M}_{eq} + \bar{M}_{ge}), \quad \bar{Q}_2 = (\bar{M}_{eq} + \bar{M}_p)/(\bar{M}_{eq} + \bar{M}_{ge}), \quad \bar{Q}_1 = -\bar{M}_y/\bar{M}_{fd}, \quad \bar{Q}_2 = -\bar{M}_p/\bar{M}_{fd}, \quad \bar{b}_1 = \bar{b}_2 = 0 \quad \text{--- (14)}$$

$$\bar{b}_1 = -(\bar{M}_{eq} - \bar{M}_y)/(\bar{M}_{eq} + \bar{M}_{ge}), \quad \bar{b}_2 = -(\bar{M}_{eq} - \bar{M}_p)/(\bar{M}_{eq} + \bar{M}_{ge})$$

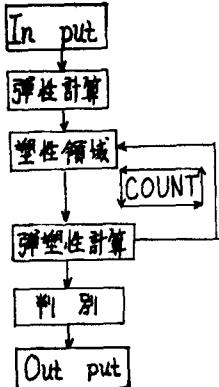
g-b スパン;

$$\bar{Q}_1 = -\bar{M}_y/\bar{M}_{gb}, \quad \bar{Q}_2 = -\bar{M}_p/\bar{M}_{gb}, \quad \bar{b}_1 = \bar{b}_2 = 0$$

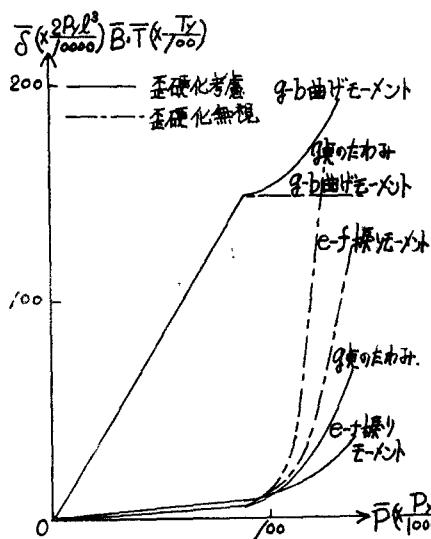
以上の諸式を用うれば与荷重下に応する各モーメントおよび変形が在来のたわみ角法と同様な手法で算定しうることとなる。

すなはち、まず材端モーメントと上端外載荷として単位荷重による式(4)の値を採用し、式(14)より塑性領域  $a, b$  および至硬化領域  $a, b$  の近似位置を求める。塑性域下限の角係数を決定、たゞえで式(13)を連立方程解き、次いで式(12)により改め

て各物理モードの半2近似値を定め、以下同様に演算区各値を所要の精度で収束するまでくり返し行う。



2 - 6



9-7

以上の演算操作の流れを図示すれば図-6のごとくなる。

また荷重実験のためみ  $\delta_0$  は次式で定められる。

$$\delta_g = -\beta F_{eq}/6 + (3+4\beta) \times 2P_y l^3/EI \quad \dots \dots \dots (15)$$

$$P_y = 8Ty(3+4\beta)/3\pi L$$

なお塗硬化域での鋼材の耐えうる最大曲げモーメント値としてはM.G.LayとT.V.Gakambasの提案(式(16))を採用した。

$$M_{max} = (\tau_u/\sigma_f + 1) M_p / 2 \quad \dots \dots \dots (16)$$

ここで  $\theta = 0.17\pi$  とり、9 点の曲げモーメントが  $M_{max}$  で達するまで  $P$  を増加させ、たゆみ  $S_9$  曲げモーメント  $M_{ge}$  および振りモーメント  $T_0$  をそれが計算した結果を図-7 に示した。

すなわち歪硬化現象によって部材を  $M_p$  以上の曲げモーメントを持つ結果部材寸手の振りモーメントおよび点のたわみが歪硬化無視(一点鎖線で示される)の場合に比べて著しく減

少し、特に振シロード下限には弾性限界以下となるなど全体の剛性が大幅に高められることが看取される。

4. 結語 式(1)および式(7)の補正エネルギー算定式を基礎として歪硬化域を考慮した弾塑性たわみ角式および厳密弾塑性挙り角式を新たに提示した。両公式を併用することにより在來の弾塑性たわみ角法と同様な手法で純曲げおよび純挙りを個々に受けた部材で構成される立体フレームの応力ならびに変形を弾塑性より歪硬化域に達するまで解析することが可能となった。また本研究の結果、歪硬化を考慮した塑性設計を行えば構造全体の剛性が大幅に高められる上、しかもだけ材料を節減して経済的有利であることが確認された。

### (参考文献)

1947. 九州大學工學雑誌第39卷 第4号 昭和42年1月

(2) T. Yamasaki and T. Ohta ; Simplified Elasto-Plastic Analysis of  
rod, Proc. of the 15th Japan National Congress for Applied

- (8) Maxwell G. Lay and Theodore V. Galambos; Inelastic Beams under Moment Gradient, Jornal of the Structural Division Proceedings of the American Society of Civil Engineers 1967, February

- (8) Maxwell G. Lay and Theodore V. Galambos; Inelastic Beams under Moment Gradient, Journal of the Structural Division Proceedings of the American Society of Civil Engineers, 1967, February.